

博士論文要約文

比較に抗して

——1945年前後の朝鮮・台湾・日本の接触思想と対話的テキスト

申知瑛

一橋大学大学院言語社会研究科博士課程

LD111005

目次

【序論】

第一章 研究目的と対象

- I. 研究目的——(元)被植民者間の接触思想 —————5
- II. 研究対象——対話的テキストと風聞的ルポルタージュ —————10

第二章 研究史検討と研究方法

- I. 研究史検討 —————18
- II. 研究方法——被植民者の接触思想：崔一秀、森崎和江、フランツ・ファノン —37

【本論】

第一章 対話的テキストにおける被植民者同士の「比較」と「共感」

- I. 「比較」に抗して —————55
- II. 比較の位階——「中央（文壇）」が配置した台湾と朝鮮 —————62
- III. 比較の連鎖——いない時にもいる「中央文壇」と植民地的感情 —————72
- IV. 共感と差異——「どうにもならない」居心地悪さ、「ふるへてゐる」翻訳 ———84
- V. 闇の中に——植民地の特異性とよその言葉 —————101

第二章 植民地博覧会における複数の地方化と被植民者の両面性

- I. 複数の地方化と複数の時間性 —————107
- II. 帝国の博覧会から拓殖博覧会へ——植民者による、また被植民者同士による地方化
—————112
- III. 植民地の地方化と被植民エリートの「欲望を伴う拒否」 —————123
- IV. 植民地内部の地方化と地方民・原住民の「積極的受動性」 —————138

V. 植民地群衆の二つの形態——博覧会でのもう一つの時間性	152
VI. 博覧会でのもう一つの時間と植民地群衆の発話——沈黙、狂気、凶行、悲鳴	165
第三章 聞こえてきた「解放・独立」「コーフク」と風聞的ルポルタージュ	
I. この時期を何と呼べるのか	172
II. 「脱植民地化の代行」という言説に対して	179
III. 「聞こえてきた」玉音放送と翻訳・変形の不／可能性	185
IV. 脱植民地化のメディア、「風聞的ルポルタージュ」	197
第四章 ソウルと台北の「風聞的ルポルタージュ」——金南天と龍瑛宗の自伝的小説・随筆	
I. 風聞的ルポルタージュ——解放期の自伝的小説(及び随筆・日記)の特性	218
II. 街の自伝的小説『1945年8.15』——朝鮮における脱植民地化と「イデオロギー対立」の間	222
III. 感情と表情の自伝的小説・随筆——台湾における脱植民地化と再植民地化の間	242
IV. 朝鮮人少女の自伝的随筆と「玉音放送」の空白——李申善「八月十五日」	255
第五章 北九州炭坑からの移住・帰郷を扱った「風聞的ルポルタージュ」と抵抗的浮遊性——安懷南の自伝的小説と上野英信の「あひるのうた」	
I. 聞こえてきた「解放・独立」と移住・帰郷の不／可能性	258
II. 風聞的ルポルタージュと朝鮮人炭鉱徴用労働者の棄民化	259
III. 噂の歴史性と異族の葛藤——安懷南の移住・帰郷の経験と「炭坑」「鉄鎖切られる」	278
IV. 移住・帰郷の不／可能性と「内国棄民」の発生——安懷南の「馬」「島」「火」	288
V. もう一つの「アラン部落」——上野英信の「あひるのうた」	297
VI. 「帰郷」が「逃走」になる時——「解放・独立」の噂と異族村の抵抗的浮遊性	309
第六章 満洲からの移住・帰郷と異族になった北と南——廉想渉の自伝的小説、座談会、北朝鮮紀行文	
I. 消えた「アジア」、露になった「民族」、形成される「異族」	315

II. 風聞的ルポルタージュと事実と風聞の混淆——自伝的小説・集団的ルポ・北をめぐる風聞	317
III. 「近い異族」の間の葛藤とアイデンティティー・スイッチ——廉想渉の帰郷・移住を扱った自伝的小説	320
IV. 「わたしたち」という境界の再形成と揺れ——北と南の「集団的ルポルタージュ」座談会	332
V. 競争する風聞、競争する事実——『以北通信』創刊号と「北朝鮮踏査記」	340
VI. 完結し得ない解放期のメディア、風聞的ルポルタージュ	350
【結論】	354
参考文献	367

本論文は、植民地末期と 1945 年前後の朝鮮・台湾（・日本）を中心に、（元）被植民者のあいだ^あ間の「接触思想（Colonial encounter）」を問い直すものである。そして、植民地主義・国家・資本によって位階化・比較・分類されながらも、そうした権力に包摂されなかった（元）被植民者の間の接触が持つ潜在的な共感や同型性、つながりについて考察した。

本論文の研究対象は、演説会・集会・座談会といった言説空間で生まれた「対話的テキスト」と、1945 年前後の自伝的小説・証言・設問・風聞・噂といった「風聞的ルポルタージュ」である。これらのテキスト群は、文学というくくりや一国の枠組みによっては捉えにくいため、これまでほとんど注目されてこなかった。だが、そこには 1945 年前後における政治権力の変化、メディアの変化、異族との接触といった当時の状況的・感情的な真実の断片が含まれている。これらのテキストの発掘・分析を通じて、本論文では台湾と朝鮮の接触、日朝（また、日韓）の炭坑労働者の接触、朝鮮南北の分断の過程を植民地主義における人種主義と関連付けながら考察した。この考察を通じて、それら「異族」の間の接触に含まれている暴力と位階構造を批判すると同時に、そこにあつたかもしれない新たな共感の潜在性（virtuality）を模索した。

本論文の独創性は、植民者と被植民者の関係ではなく被植民者同士の関係を思考する方法を模索した点、その関係を読み取ることができる対話的テキストと風聞的ルポルタージュというカテゴリーを発掘・整理し、また既存の文学も再解釈した点、そして朝鮮文学と台湾文学の相互テクスト的な関連性を浮き彫りにした点、この三つの点にある。

次に、本論文の立ち位置について、序論の内容を整理しながら述べておく。

第一に、宗主国と植民地の接触という枠組みで植民地主義を捉えてきたこれまでの研究方法を、（元）被植民者間の接触を中心に据えることで問い直した。また、（元）被植民者の間に重点をおきながら、（元）宗主国の労働者と（元）被植民地の労働者の間、さらに朝鮮の南北の間といった境界において見られる、植民地化されて棄民になった異族同士の接触を分析した。このような本論文の視点は、主に宗主国と植民地の関係を中心に様々な帝国や植民地を比較してきた帝国史研究やポストコロニアル研究、国民国家批判に基づいた言説研究とは異なるものである。

このような方法を通じて、本論文では、被植民者が共有している否定的な感情（憂鬱・焦り・揺れ・嫉妬・無気力など）の意味、植民地主義が植民地に内面化されることによって生じるアンビバレントな感情、元被植民者が「解放・独立」「コーフク」について感じた希望

と絶望のつながり、アジアの熱戦（冷戦）によって同じ民族の中に作られた「異族」の境界をめぐる揺れを明らかにした。特に、権力によって位階化・比較・分類されながらも、そこに包摂されない（元）被植民者間の接触の潜在性を浮き彫りにした。

第二に、「接触思想」を分析する思想的方法として、森崎和江、崔一秀、フランツ・ファノンの思想を 1945 年前後の東アジアの状況に置いて問い直し、二つの遂行文の問いとして変形させて援用した。

まず、森崎和江が、植民地主義・国家・資本に媒介されない底辺労働者に基づいた接触を模索したことに着想を得て、「他者は比較級なしに出会えるか」という問いを立てた。しかし、森崎は（元）宗主国の労働者と（元）植民地の労働者の間にある位階にあまり関心を払っていないために、それを補うべく韓国の文学批評家である崔一秀の接触思想も援用した。崔は韓国の民族文学を東南アジアのいわゆる第三世界の民族文学（タイ・ビルマ・インドネシア・マレーシア・ヴェトナムなどの文学）とつなぎ合わせて考察した批評家である。崔の考察を参照し、朝鮮人の「解放・独立」によせた脱植民地化への企画と台湾や他の元被植民者の脱植民地化への企画をつなげる方法を追求するために、「脱植民地性は他者性と共存できるのか」という問いを立てた。さらに、フランツ・ファノンの思想からは、内面化された植民地主義が（元）被植民者間の関係に如何なる影響を与え続けるのかを分析するためのヒントを得た。

したがって、本論文で用いる「接触」という用語は、直接的な身体接触だけではなく、政策・制度・労働システムや言説上での強制的な接触をも含むものである。それと同時に被植民者同士の共感の潜在性を探るための用語でもある。

第三に、植民地期から自主的に展開されてきた「解放・独立」との連続性があるものとして 1945 年前後という時期を捉えながら、脱植民地化の代行論を批判した。その上で、この時期における限りなく多様な経験を想像するために、「この時期をどう呼ぶことができるのか」という問いを立てた。具体的には、朝鮮での「解放・独立」や台湾での「コーフク」が

まるで噂や風聞のように聞こえてきて、さらにそれを他へと伝えていくという過程を分析し、その過程の中に現れてくる状況的・感情的な真実、自主的な脱植民地化への模索、異族との関係の変化を考察した。また、移動の方向性が帝国や国民国家の内部に固着してしまう「帰国・帰還」「引揚げ」という言葉に換えて「移住・帰郷」という表現を用いることによって、朝鮮や台湾に戻らずに日本で不可視化された村を作ることになった存在を浮き彫りにした。

第四に、一分野や一国家の観点では捉えにくくなっていた対話的テキストと風聞的ルポルタージュを発掘・整理すると同時に、作品・作家論として研究されてきた小説を対話的テキストや風聞的ルポルタージュとして新しく解釈することで、記録文学や証言文学を新たな文学研究の分野として取り入れるための枠組みを作り出した。

まず、対話的テキストは演説会・討論会・講演会・座談会といった集団的な発話行為から生産されたテキストである。これらのテキストは、メディアの変化、政治権力の変化、異族との接触などが豊かに表現される「出来事の時空間」である。また、歴史的な事件に反応しながら、使用言語・参加者・参加方式・発話位置などがダイナミックに変化する「翻訳的時空間」でもあった。本論文では、対話的テキストの中でも特に（元）植民者と（元）被植民者、また（元）被植民者同士の関係が色濃く反映される座談会に光を当てて、民族・階級・制度・ジェンダーといった要素が複雑に入り混じった関係を、その発話行為の戦略と表現から分析した。この際の「発話行為（Speech Acts）」とは、言語の面にのみ限定されず、発話行為を拘束する諸条件から逃れようとする可視的／不可視的な身体的行為までを含む。

次に、風聞的ルポルタージュとは 1945 年前後における風聞と事実、フィクションとノンフィクション、個人と社会が明確に区分されずに互いを内包しながら形成されたテキストを指している。これらのテキストには、噂・風聞や、街で邂逅するビラ・集会・見知らぬ声などがそのままテキスト中に組み入れられており、作者の意図を超えて当時の状況的・感情的な真実の断片を含んでいる。特に、本論文では、「解放・独立」「コーフク」が聞こえてきて／を伝えていく過程に着目し、自主的な脱植民地化への欲望や、当時の状況的・感情的な真実、異族間の人種主義的な葛藤、アジアの熱戦（冷戦）による分裂を分析した。さらに、風聞的ルポルタージュは、「語る」権利を持たず「語られる者」としてしか言説空間に現れなかった言葉を持たない人々、彼／彼女らの表現が持つ意味をつかむ手掛かりにもなりうることを示唆した。

次に各章の内容を整理する。

本論の第1章では、「他者は比較級なしに出会えるか」という問いから、座談会や、雑誌における文学特集の企画文や、あるいは書簡といった対話的テキストに見られる発話行為を分析した。その際に、朝鮮作家・金史良と台湾作家・龍瑛宗が交わした書簡での表現——「ふるへてゐる」翻訳と「どうにもならない」居心地の悪さ——を分析の道具にした。これらの表現と似た発話が、本章で扱った種々のテキストにおいて、植民地の「特殊性」論争、発話ゲーム、翻訳不可能性といった形で台湾と朝鮮の文人たちの発話に同型的に登場する。これらの同型性に注目し、帝国文壇に布置された台湾と朝鮮の文人の接触を「比較されながら共感し、競争させられながら連累していく」状況として整理した。結論では、金史良の「光の中に」と龍瑛宗の「宵月」の相互テキスト性を、両者が書簡で示した各々の作品への感想を手掛かりとして分析し、台湾文人と朝鮮文人の間の「特異性 (singularity) を通じた共感」を浮かび上がらせるべく試みた。

第2章では、植民地博覧会をめぐる感想文・記事・漫画・懇談会などを対象とし、植民地博覧会で出会った被植民者の間に人種主義が連鎖していく様子を分析した。被植民エリートは、植民地博覧会を欲望しながらも、その催し自体が植民地主義であることを知ると強い拒否を見せる。この反応を本論文は「欲望を伴う拒否」と名付けた。また、朝鮮の「田舎者」と台湾の原住民は植民地博覧会や文明に好奇心を持って近づくが、見知らぬ文明に驚き怖がったり気が狂ったり破産したりする。これを「積極的受動性」と名付けた。植民地博覧会に対する、この両面性 (ambivalence) を帯びた被植民者の反応を浮き彫りにすることで、台湾と朝鮮の潜在的なつながりを探った。加えて、朝鮮作家・廉想渉の「狂奔」と台湾人作家・朱点人の「秋信」という作品を分析して、植民地博覧会に植民地主義に包摂されないもう一つの時間が流れていたことを明らかにした。

第3章では、1945年の前後をつなぎ、脱植民地化を新たにとらえる方法を模索した。1945年8月15日の朝鮮と台湾で、玉音放送が聞こえてきて／を伝えていく過程における元

被植民者の翻訳・変形・専有行為に注目し、脱植民地化の代行論を批判的に問い直した。また、朝鮮と台湾で「解放・独立」「コーフク」が聞こえてきて／を伝えていく状況を含んでいる風聞的ルポルタージュを発掘・整理した。朝鮮については、街の声をそのまま含んだ設問・探問・宣言文・報告文・座談会を分析した。台湾については、再植民地化という状況下で新聞・雑誌の日本語欄が政権に対する批判、台湾人の内面、街の声を含んだメディアとして機能していたことを分析した。これらの分析から、1945年前後という時期に脱植民化への希望と再植民地化・占領化という絶望を共に味わった、台湾と朝鮮のつながりを浮き彫りにした。

第4章では、脱植民地化への希望と、再植民地化・被占領の絶望とが共存した台湾と朝鮮の状況を、朝鮮作家・金南天の自伝的小説「1945年8.15」と、台湾作家・龍瑛宗の短編小説および随筆を検討することで思考した。金南天の「1945年8・15」は、1945年8月末から10月までにソウルで飛び交っていた噂・風聞・ビラ、開催されていたデモや集会、その間の新聞報道などが小説の中に取り入れられている風聞的ルポルタージュである。そこには、「与えられた」解放が翻訳・変形・専有され自主的政治体制を模索していく様子と、朝鮮南北の分断が深まっていく様子が描き出されていた。

龍瑛宗の随筆「二人乗り自転車」「台北的表情」には、台北という街の表情と声、街に回ったビラなどが取り込まれている。小説「汕頭から来た男」「燃える女」「哀しき鬼」は、いずれも誰かから話を聞いたり会話をしたりする構造を持っていて、台湾人の感情を聞き書きするという要素を含んでいるが、最終的にはその会話の相手は皆死んでしまう。これらの作品からは希望と憂鬱、脱植民地化と再植民地化が重なっている台湾の状況を読み取った。

第5章では、元宗主国の労働者と元植民地の徴用労働者の接触を論じた。北九州に強制徴用された朝鮮人徴用者の移住・帰郷を描いた安懐南の自伝的小説と、1950年代の北九州炭鉱の「アリラン部落」をテーマにした上野英信による自伝的かつルポ的な小説「あひるのうた」を連結させながら分析した。

安懐南の自伝的小説「炭坑」「鉄鎖切られる」では、小説中の「玉音放送」を聞く様子や各民族間に流れた噂が、実際の朝鮮人徴用労働者の証言と類似性を持っていた。「馬」「島」「火」といった作品には、移住・帰郷を試みるがそれが失敗に帰ってしまう存在が登場する。これらの小説を上野英信の「あひるのうた」と照らし合わせながら、元宗主国の労働者と元被植民地の労働者が炭坑労働において代替されながら出会い損なう過程を示した。そして、噂でしか語られない「アリラン部落」で徴用された朝鮮人と、リストラで棄民になった日本人炭鉱夫が混在した部落の意味を論じた。最後に、炭坑に関連する風聞的ルポルタージュに労働者の逃亡・逃走のモチーフが頻繁に登場することに注目し、その意味を「解放・独立」と結び合わせ、元宗主国の労働者と元植民地の労働者が共通に持つ「抵抗的浮遊性」として解釈した。

第6章では、植民地期に作られた位階が元被植民者の間に人種・階級・ジェンダー・イデオロギーの葛藤を増幅させた様子と共に、アジアの熱戦(冷戦)によって朝鮮南北の分断が深まっていく様子について考察した。まず、満洲から朝鮮北部を経てソウルに着くまでの移住・帰郷を扱った廉想渉の自伝的小説を具体的な考察対象として取り上げ、人種間の殺害事件が組み込まれたその小説の中で、肌の色を同じくする人種間でのアイデンティティ・スイッチが現れることを指摘した。

他方で、アジアの熱戦(冷戦)によって異族の境界が朝鮮内部の南北の境界へと再編成されていく過程を、雑誌『新天地』の座談会の「集团的ルポルタージュ」形式に注目して論じた。また、朝鮮北部に関する風聞や旅行記が登場しはじめ、風聞と事実と主張が互いに競い合いながら北をめぐる言説を形成していった様子を浮き彫りにした。そして、朝鮮南北の関係を、完結できない揺れと相互翻訳性を持続していた関係として論じたうえで、分断状況を第三の眼差しで見る方法を模索した。

では、本論文の成果を研究方法とテキストの面に分けて述べる。

まず、本論文では植民地主義を研究するための方法として、植民者と被植民者の接触だけでなく(元)被植民者同士の接触にも光を当てた。そうすることで、(元)被植民者間の

接触は、植民地権力・国家・資本によって位階化・比較・分類されながらも、それに包摂されなかった潜在的なつながり・共感を持っていたことを明らかにし、その具体的なありようを追跡した。それらのありようを整理すると以下の通りである。

第一に、否定的なこととして捉えられた被植民者の感情——憂鬱・焦り・無気力・嫉妬・競争——と、発話行為による言語ゲーム——沈黙・遅延・質問——など、言葉には明確に表現できない（元）被植民者の間の共感があることを指摘した。これを指摘することは、植民地の言説空間の内側から植民地主義への抵抗的な場を見出す作業につながると考えられる。

第二に、台湾と朝鮮の接触を考察することで、植民地主義の中に人種主義がいかにかに内面化され、被植民者の内部における関係がいかにかに分裂していったかを明らかにしながら、そこで浮き彫りになる被植民者の両面性を「拒否を伴う欲望」「積極的受動性」と表現した。こうした表現により、被植民者の行為を、受動的でありながらも抵抗性を持つものとして考えることが可能になるだろう。その点において、植民者の両面性と被植民者の両面性が持つ差異を明らかにすることができた。

第三に、朝鮮と台湾、さらに他の植民地化を経験した民族が、互いに出会い損ないながらも、1945 年を前後する時期に同型的な流れによって貫かれていたことを明らかにした。台湾と朝鮮がそうであったように、脱植民地化が再植民地化・被占領に変化し内戦・独裁へと続いていった経験を持つ諸民族の場合、脱植民地化は植民地期が終わった後にも模索され続けなければならないものであった。そして、その経験の中で生産されたテキストには、絶望と希望が混じり合った感情、不安に満ちた脱植民地化への模索、植民地期から形成された人種・階級・ジェンダー間の様々な葛藤、アジアの熱戦（冷戦）構造によって「異族」の境界が徐々に民族の内部へと移っていく様子などが表現されていた。したがって、1970 年代の第三世界論や今日の東アジアの連帯論を深く理解するためには、植民地期や 1945 年前後における（元）被植民者同士の接触にまで遡って考察する必要があるといえる。

次に、テキストの次元では以下のような結論に至った。

第一に、文学というくくりや一国的な枠組みでは捉えられなかった対話的テキストや風聞的ルポルタージュを発掘・整理した。座談会・旅行文・集会などの記録・報告文・設問などといったテキストである。そこには当時の街や言説空間の雰囲気や 1945 年前後における権力の変化やメディアの変化、様々な異族との接触によって生み出された感情や発話行為、言葉にならない身振りなどが豊かに含まれていた。朝鮮の場合、南北が次第に分断されていく過程で産出されたそれらのテキストには、北に関する様々な風聞・事実・主張の間で互いの参照と翻訳（誤訳）が繰り返されていた様子が見て取れ、それゆえに南北の葛藤を第三の眼差しで見る可能性を内包していた。

第二に、既存の文学研究の中で作家論・作品論の枠組みで考察されてきた作家・作品を新たに解釈する枠組みを作ろうとした。その試みとして、まず、座談会、文学特集の企画文、書簡などの対話的テキストと、金史良・龍瑛宗の作品を関連付けて考察した。この作業により、当時の帝国文壇と植民地文壇の位階関係において彼らの言語表現が持った意味と相互関連性をより深く問うことが可能となり、被植民地の作家がそれぞれの特異性でつながる様子を捉えることができた。また、植民地博覧会に対する報告文・感想文・記事と、植民地博覧会が描き込まれた被植民地民作家の作品とを結びつけながら考察した。この作業では被植民地の群衆が持つ特質を浮き彫りにした。

第三に、1945年前後に書かれた金南天・安懷南・廉想渉の自伝的小説を風聞的ルポルタージュとして捉え直し、これまでの作家・作品論を乗り越えて、これらの作品を1945年前後という時代状況が生み出した集団的テキストへと開かれたものとして読む枠組みを作ろうと試みた。具体的には、自伝的小説に見られる噂・風聞・見知らぬ声・記事・ビラ・出来事などと、実際の証言記録や史料に確認できる噂・風聞・新聞記事・ビラとの類似性を明らかにした。この試みは、これらの文学作品を、時代的な制約や個々の作家の世界観という限界を超えて、テキストの剰余や外部へ開かれたものとして読むことを可能にする。さらに、人種・階級・ジェンダー・イデオロギーの葛藤、さらには朝鮮北部をめぐる種々の異質な風聞と主張の共存など、当時の多様な声を含むテキストとして読み直すことを可能にする。

以上のような対話的テキストと風聞的ルポルタージュの発掘・整理、一国の枠を超えたつながりの発見、また既存のテキストを時代や出来事を中心において読み直す方法などから、今後の文学研究に資する新たな分析方法やカテゴリーの創出が可能になると思われる。

人為的・自然的災害や、近代の技術文明が生み出した事故、労働力の世界的再編成、戦争の危機による難民の発生などの出来事が全世界的に起きている今日では、既存の文学ジャンルに収まらない新たな創作が生まれつつある。本論文で扱った対話的テキストと風聞的ルポルタージュは、まさに今日のように変動の激しい時代に、変動するものの姿を見て書き、そのものが響かす声を聞いて書いたものである。したがって、対話的テキストと風聞的ルポルタージュは、文学と証言、文学とルポ、文学と噂・風聞、個人の記録と集団的な記録といった二項対立のくくりを超えて時代の変動を表現し、声を持たない人々の経験や感情もそのうちに含み得る、新たな記録文学だといえる。

本論文の今後の課題は次の通りである。

本論文は、南北朝鮮の分断状況を念頭に置いていたため、1945年前後の三人の作家によ

る自伝的小説の場を、ソウル、南方からの移住・帰郷、北方からの移住・帰郷と分類した。

しかし、これは朝鮮を中心に置く地理感覚である。分断状況に対する研究を深め、新たな地理区分を模索し、シベリアや東南アジアを視野に入れつつ、不可視化された村や島からの目線で研究を深める必要がある。また、本論文に含めることが叶わなかったが、以下の研究を今後補足していきたいと考えている。それは、ルポルタージュに対する系譜学的接近、1945年8月15日より後に開かれた文学座談会の地域別の差異と共通点、女性の経験を含んだ対話的テキスト・風聞的ルポルタージュの発掘である。これらの作業によって、植民地主義・国家・資本に媒介されながらも、そこに包摂されなかったもう一つの接触の倫理・共感・表現を、さらに深く模索できるだろう。